

過渡經驗に就て

大 脇 義 一

大正十二年十二月本誌第九十三號に私はリンド

ヴォルスキイ氏の理論心理學なるものを紹介したがその中で問題になつてゐた過渡感覺 Übergang-

empfindung 又は過渡經驗 Übergangserlebnis に就

てその後一二の文獻を手にすることが出來たので

あの不充分的紹介への脚註といふような意味で少しく述べてみたいと思ふ。

Lindworsky, J.: Umrisskizze zu einer theoretischen

Psychologie, 1922.

過渡經驗なる命名をば始めてその一群の現象に與へたのはシユーマンである。

Schumann, F.: Beiträge zur Analyse der Gesicht-

tswahrnehmungen. Zeitschrift für Psychologie.

Bd. 30. 1902.

Schumann, F.: Zum Problem der scheinbaren

Grösse. Bericht über d. VI. Kongress f.

experimentelle Psychologie. 1914.

けれども此の現象が特に人々の注意を引くようになつたのはそれより後年後のことに屬する。

先づシユーマンは吾々の比較作用が從來起憶表

象を以て説明されてゐるこの不合理を見出し

た。いま繼時的に與へられた二つの視覺刺激を比較するといふ場合に第一刺激の明瞭なる記憶表象

が確められないにも拘らず何故比較作用が可能で

あるかといふことを考へて彼はそれが恐らく第一刺激の無意識的なる痕跡が残され第二刺激は爲に變容されて知覺される。比較作用は此の變容に基いて行はれるのではないかと推定した。そして彼は遂に此の第一刺激の影響による第二の知覺内容の變容をば内省によつて明かにすることが出来た。

それは例へば大きさを異にする二個の水平線を繼時的に比較すると第一刺激の短い方の直線に相當する長さだけが第二刺激たる直線から「切り取られる。そしてその部分だけが前へ「浮き出て」來る。此の切り取られた部分の浮き上りは「注意の擴り」といふ形をとることもある。その反對に第一刺激より第二刺激が小であると「注意の縮り」といふ形をとる。彼はその外太い線と細い線、或は明暗の比較に就いてもさういふ副次的印象が其に對應した判斷と聯合を形造り以て比較判斷の根據をなすことを見た。過渡經驗と名けられたのはか

ような經驗である。

その後、過渡經驗は比較作用或は關係の理解なる現象の研究と結びついて追々學者の注意を引くに至つた。就中此の新しい比較判斷の説が鋭い批判を受けたのは哲學の方面からである。ブルンスウィツヒは數ヶ條の不合理な點を擧げて之を難じてゐる。

Brunswig, A. über das Vergleichen und die

Relationserkenntnis. 1910.

(一) 謂ふ所の副次的刺激——切り取られる、暗くなつて見える、太くなつて來るなど、言はれるものは位置の變化とか光彩の變化とかの知覺であつて大き、又は大きの關係の知覺とは明かに直接の關係なきものである。たかゞ經驗によつて二次的に之が關係を獲るに過ぎぬ。

(二) 關係の判斷とは二個の客體間を等しく浮動し支配する關係に就いて下されるものである。

ところが感覺的に與へられてゐるのは唯だ客體だけである。その中間に浮動するもの、その關係は與へられてゐない。だから關係は非感覺的な作用に因らざれば補足され得ないものである。

(三) 確かに比較判断は二個の客體を單に繼時的に比較するだけで自動的に産出されるものではない。寧ろ比較判断は特殊な内面的舉動を、對象相互間の往來を、即ち比較せんとする意圖を豫想する。副次的印象は之に反してかゝる意圖なしに、單に對象を受動的に知覺するだけでも現はれる。副次的印象が比較過程に本質的なものでないことは是を以てもわかる。

(四) 往々にして副次的印象は暫有的であり不明瞭である。

(五) 副次的印象が缺けてゐる場合がある。其にも拘らず比較作用は行はれる。比較の根據たるものであれば必ず存在して居るべき筈である。

此等一々の難點はなるほど一應は尤ものように考へられるけれども一層仔細に事態を檢してみると必ずしも正當ではない。エンシュは其を確めてみた。

Jaensch, E. R. Einige allgemeinere Fragen der

Psychologie und Biologie des Denkens, 1920

エンシュは先づ比較作用、特に繼時的比較に於て經驗される副次的印象の中で本質的なものと偶然的な要素とを峻別する必要を認めた。その時々によつて異なる現出様式 *Erscheinungsweise* の差異、例へば第二刺激の光彩の差異の如きは單に偶然的な同伴現象に過ぎぬものである。けれどもエンシュマンの言ふ「浮き出る」「縮まる」などの運動は比較作用の根本的な同伴現象である。此の變化の、移り行きの、即ち運動の經驗こそは「太くなり」「暗くなり」「あざり行き」する經驗こそは比較過程の根據である。而して此の經驗は比較の意圖が強け

れば強いほど明瞭に現はれる。ところが觀察者が此の意圖を抱くこと少く、刺激の繼起をば單に受動的に受けとるだけであればあるほど不明瞭である。そして其に代つて偶然的な副次印象の方が明瞭に現はれて来る。

また重要なことはエンシユによると過渡經驗の性質が可なりの範圍まで對象そのものには依據せず、對象の差異に基くことである。例へば「明るくなる」といふ過渡經驗は第一刺激「黒」から第二刺激「灰色」へ移る場合でも、第一刺激「灰色」から第二刺激「白」へ移る場合でも殆ど變りは無い。即ち過渡經驗は明度の系列、或は大さの系列中に於ける對象の絶對的位置とは甚しく無關係である。かういふ事實を以てすればさきのブルンスウイツヒの論難の多くは當らないことがわかる。過渡經驗と關係の覺知との關係は經驗の媒介に因つて得られるようなものではなく最も直接な本質的な

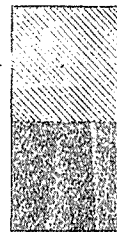
ものである。

また、そういふ過渡經驗は「二個の客體の間を一樣に浮動し支配する」といふ要求にも適つてゐる。といふのは過渡經驗は二つの對象の中の何れの質へも屬しないものであるからである。

それから又、この經驗は不明瞭な爲にそれ自身として意識されない場合こそあれ、比較作用には必ず伴ふものである。而も其は誰にでも不明瞭であるのではなく、或る個人には明確に確められることがある。殊に不明は觀察者の意圖即ち態度と密接な關係を持つ。

これらの事がらに依つて過渡經驗が比較判斷の根據たり得るといふことはわかる。けれども事實果してどうであるかを確める爲にエンシユは猶ほ興味ある動物實驗を試みてゐる。

いま上圖の「J」は暗灰色 d と中灰色 m を持つ厚紙、I は中灰色 m と明灰色 h を持つ厚紙なりと



I
 する。彼は先づ厚紙 I の上
 一面に餌を置いて一匹の雞



II
 鳥に m の部分にある餌はい
 つも食へるが d の部分にあ
 るのは食へないといふこと
 にしつけ Dressur をした。

此のしつけはやがて立派に出来上る。その鳥を I
 の前につれて來ると必ず即座に何の躊躇もなしに
 m の部分を嗜むようになった。

そこで此の鳥をば今度は厚紙 II の前につれ來つ
 て m か h か、どちらの部分にある餌から先に食ひ
 始めるかを見た。一寸考へると今までは I で m の
 部分のばかりを食つてゐたのであるからやはり m
 から先に嗜み始むべき筈である。ところが其にも
 拘らず鳥は先づ h から食ひ始める。或は空間的の
 位置を變更し、或は實驗者の影響を防ぎ、その他

あらゆる考へ得べき誤謬の原因を避けて度々之を
 反復したがいつもそうである。

此の事實は吾々に何を語るであらうか。如何に
 説明さるべきであらうか。エンシュに言はせると
 此の事實は唯だ動物が上述の過渡經驗によつて判
 定したといふことを假定しなければ不可能であ
 る。鳥は中灰色 m そのものを、即ち對象の明度に
 於ける絶對的位置を認知して行動したのではなく
 より明るい方、即ち明度の相對的關係、換言すれ
 ば過渡の關係といふものに基いて行動するものと
 言はなければならぬ。

尤も動物は可なり長い間あちこちと頭をかしげ
 て「熟慮」するように見える。けれども是は決して
 超感覺的な比較作用をしてゐるのではない。もの
 を考へて頭をひねつてゐるのではなく、暗い方と
 明るい方を交互に見通し、其に因つて過渡經驗
 をば極大の明確度に達しめんが爲である。

一方彼は人間にあつても大きさの比較能力は過渡經驗の存否に應じて生滅するものと考へる。十六歳で大きさの比較が異常に出来ない男兒があるが其は一定條件の下に感覺の特殊事情あるが爲に過渡經驗を持ち得ないからであると見られる。しかし是は必ずしも異常兒童だけに限つたことではなく程度こそ劣れ過渡經驗を便りに比較判断が行はれるのは兒童の一般的な特性である。のみならず、もつと後年に於てすらなほ多く殘留せることが見られる。それ自身として單獨に意識されるには餘りに微弱であるが。

エンシユより稍遅れて同じく雞について觀察を試みたリーケルも亦た同じ事實を確めることが出來た。

Rickel, A.: Psychologische Untersuchung an

Hühnern. Z. Psy. Bd. 89. 1922.

それより少し前に同じくしつけ法 Dressurmetho-

de又は聯合法 Assoziationsmethodenを以てケラーが鶏及び黒猩々の關係知覺を調べたことは多くの人に知られてゐる。而て彼も亦た此等の動物が絶對的印象にしつけられるのではなく相對的關係にしつけられるものと推定し得べき結果を得た。但し此の事實の説明に就いてはケラーやコフカの所見とエンシユの立場とは著しい差異を示してゐる。

Köhler, W.: Nachweis einfacher Strukturfunktionen beim Schimpansen und beim Haushuhn. 1918.

Köhler, W.: Intelligenzprüfungen an Menschenaffen. 1921.

Koffka, K.: Die Grundlagen der psychischen Entwicklung. 1921.

かような關係捕捉についての學說のことは暫く描いて、同じく過度經驗に關する近頃の業積にカトーナの研究がある。

Katona, G.: *Psychologie der Relationserfassung*
und des Vergleichens. 1924.

カトーナのは然し動物實驗ではなく成人を觀察者とする簡單な心理學的實驗である。それは位置及び大きさを異にする旗形の圖形の比較を常恒法の下に行つたもので觀察者は十人である。是に因つて彼は大きさの差違を比較する場合にはいつも過渡感覺が經驗されることを見た。のみならず、その過渡經驗は同一ではなく夫々違ひがある。しかし其違ひは量の差異ではなく明度の差違である。極く明瞭で確實な經驗と不明瞭不確實なものとがあつて、その兩極點の間にあらゆる中間段階がある。明瞭確實な過渡經驗に基いた關係知覺が起る場合には確實な、多くの場合正しい關係判斷を得る。がその反對に過渡經驗が不明瞭であると關係知覺はずつと困難で不確實となり従てその關係判斷は誤謬が多い。

過渡經驗に就て

要するに過渡經驗は明度の差異を持つに過ぎぬ。而して明瞭な過渡經驗が現はれむが爲には關係に置かれた客體の相違がある一定の大きさを持つことを要する。けれども是には極限點がある。此の點を過ぎると過渡經驗の現はれる可能性が無くなる。そうすると吾々は間接的比較に因て、多くは絶對印象に因て判斷する。更にその差を大にするに遂に關係知覺は無くなつて兩客體の差別に注意するに過ぎなくなる。又兩客體の差が極く小となれば端緒的な過渡經驗が起り、不明瞭な誤謬の多い關係判斷を下す。カトーナは結論して言ふ。關係は本來たゞ一つの方法によつてしか捕捉されない。あらゆる他の可能な場合はみな此の一つを豫想して居る。その一つとは即ち過渡經驗に基いた關係知覺である。

リンドゾオルスキイは比較なる經驗が全然過渡感覺に還元し得らるゝや否やは問題であるとして

エンシエの所見を反駁してゐるが其は在來の複合説の説明法に従ふか、近頃の形態説 Gestalttheorie の如き立場を採るかといふ學説の上の相違である。その何れに従ふにしろ比較過程を分析すれば過渡經驗といふものが發見されるといふ事實は動かないものと思はれる。

それから猶ほ注意すべきことは關係の知覺と區別の知覺とを混同すべからざることである。關係知覺はある意味に於ては又區別の知覺であるとも考へられるが、ある場合では關係が知覺されるだけで客體の區別は知覺されず、關係が知覺された結果、その區別が認められる。逆に是を言へば、たとへその結果なされた判斷が關係の判斷であつたとしても全ての區別知覺が關係知覺ではない。關係の知覺と區別知覺とは全く別なものである。前者は原本的な直接な現象であるが後者はある印象の知覺と他の印象の憶起とに分たれる。此の二

つの複合であつて固有の現象ではない。であるからリンドヅオルスキイのように動物が感覺内容の區別出來ぬことを以て直ちに關係知覺の存在を拒むことは出來ない。過渡感覺に支持された關係知覺は差違の認識よりもつと根本的な要素的な經驗である。

吾々は今關係知覺といふ語を使て來た。しかし是は普通の知覺、例へばある風景の知覺とは稍趣を異にする。後者にあつては生理學的及び物理學的相關作用が明かに認められる。けれども關係知覺に於ては其が明かでない。マイニングは關係を以て高次の對象となし産出 Production によつて捕捉されるものなりと言ひ、テオドル・リツプスは關係がそれ自身として對象中に存するものに非ずして自分が之を創作し、わが内に起る事として經驗するものなりと言つてゐる。此の産出とか創作とか呼ばるゝ事柄は知覺内容を比較する場合に

經驗された過渡經驗なるものを俟て始めて客觀的根據を得るものであるとは言ひ得ないであらうか。過渡感覺はカトリーナの言へる如く主觀の表現として主觀から投射されたものと見做されないであらうか。過渡經驗は主觀が外部の環境に對する言はゞ一つの反應である。吾々が空間的、時間的及び内容的接近といふ一定の外部條件に對する反應である。過渡經驗と呼べるゝ現象は此の點に於て心理學上に固有の意味を持つてゐる、而て上述の如き成立を持つ運動錯覺としてヴェルトハイマー等の偽運動も亦た一種の過渡經驗に外ならぬ。

Wertheimer, M.: Untersuchungen über das Schen

von Bewegung, Zeitschrift für Psychologie, Bd.

61. 1912.

とは言ふものゝ此處に言ふ過渡感覺とヴェルトハイマーの觀察した偽運動とは主觀的條件に於ても客觀的條件に於ても著しい差異がある。後者は觀

察者の特別の意圖なしに印象を受動的に眺める態度であるが前者は比較せんとする明確な意圖を以て能動的に印象を捕捉せんとする態度である。又客觀的條件に就いてみても刺激の與へられる時間的空間的配置に著しい相違がある。此の二つの經驗がどういふ關係にあるか。何れが本質的のものであるか。兩者何れも他の感覺に還元し得るかなどいふことは吾々にとつて一つの興味ある問題ではないかと思ふ。